



公益社団法人日本ボクシング連盟顧問

なかむら つかさ
中村 司さん

Profile

1957年佐賀県生まれ。1980年モスクワ五輪のボクシング日本代表。現在は、群馬県ボクシング連盟役員も務め、アマチュアボクシングの普及に尽くす。

幻の五輪代表から次世代育成へ

1 980年、世界中の注目が集まったモスクワ五輪。ボクシングのライトフライ級で日本代表に内定していた中村さん。輝くスポットライトの下、日の丸を背負い、四角いリングの中で世界と拳を交えるはずでした。しかし、その夢は政治というリング外の事情によりついで、日本が五輪不参加を表明したことで、中村さんの五輪出場は幻と消えました。

中村さんがボクシングに魅了されたのは、中学生のとき。当時は野球部に所属していましたが、テレビで見たボクシング中継に衝撃を受けました。リングの中央で繰り広げられる、一対一の真剣勝負。男たちのぶつかり合いに心を奪われたと言います。高校から本格的にボクシングを始め、「日曜以外はずっと練習していた」と当時を振り返ります。大学でもボクシング部に入部。リングへの情熱は、ますます熱を帯びていきました。大学1年のとき、五輪代表を決める「ベルト争奪戦」が始まりました。これは、ベルト保持者に挑戦者が次々と挑む形で、最終的にベルトを手に入っていた者が代表に

なるというもの。「10回くらい戦って、自分が最終勝者となり、五輪代表が決まった」と話します。大学を留年してまで五輪に向けて練習に打ち込む日々。しかし、そんな努力が実を結んだ矢先、日本の五輪不参加が決定。「もちろん悔しかった。でも、最初に感じたのはほっとした気持ちだった」と語る中村さん。それは、過酷な減量や心身を追い込む日々から解放される安堵感から来るもので、「意外でしょ」と笑いながら話します。

現役引退後、中村さんは高校教師の道へ進みます。教壇に立ちながら、ボクシング部の顧問として指導に当たり、定年退職後も外部コーチとして後進の育成に情熱を注ぎます。「ミットは今でも受けている」と話し、「生徒たちにはボクシングを通じ、色々な社会勉強をしてもらいたい。もちろん選手として強くなるのが一番」と話す中村さんの表情には、指導者としての誇りと喜びがにじみまします。夢の舞台には届かなかった中村さんの拳は、新たな世代の夢を育む力となり、未来を夢見る若者たちを真つすぐに照らしています。